
宇宙へ

nyokki

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宇宙へ

【Nコード】
N2838R

【作者名】
nyokki

【あらすじ】
後で書かせてもらいます

episode 0 : E D E N

SF小説【宇宙^{そふ}へ】

第一部：統一

episode 0 : E D E N

男は仕事、子供は学校へ行き、主婦たちは家で家事をしている、静かな平日の昼間。春の陽気に誘われ、街中に飛び交う蝶や、様々な鳥たち。すべての生き物が、その平和を、命を謳歌していた。そんな5月のベルファストに響いた、一発の砲声。その巨大な空砲を合図にして、街に大量のミサイルが撃ち込まれた。5月17日、11時37分の事である。そしてその後、ベルファストを皮切りにして、ルクセンブルクやベルリン、パリ、ロンドンといった、ヨーロッパの主要5都市が、その日の“正午まで”に攻撃を受け“その日の内に”陥落した。各都市の防衛機能は、過去の大戦が終了した1945年以来、およそ280年に渡って使用されていない事もあり、全くと言って良いほど機能しなかったようである。地球上に暮らす人類の、平和呆けを顕著に表すこの事件は「5月事変」として、他国の政府を戦慄させた。

攻撃を仕掛けた犯人は、木星の衛星軌道上にあるコロニー《ユピテル》を拠点に、反地球をモットーとして活動する反地球政府武装組織《Shangri-la》。自立型コロニーとして、自立活動に成功したユピテルへの物資供給を絶った地球政府に反対しての攻撃だった。この攻撃が、後に太陽系を巻き込んだ、大きな戦争へと広がる事になったのである。

- - - - -

2145年、二次世界大戦が終幕を迎えてちょうど200年後、世界の統一と平和を願った人類は、ようやくにして1つの連合体に纏まった。その名も地球開發生産連合。通称《EDEN》（Earth Development and Employment Nation）である。そして、新たな世界政府が実行に移したことが、宇宙進出だ。地球上の人口は、最早100億人に届かんとし、パンク寸前だったため、その溢れている人口を宇宙に移そうというのが、表向きの理由。そして、コロニー開発を行う事で、人口が増えるにつれて増加した失業者を捌こうというのが、裏向きの理由である。失業者の数が増えれば増えるほど、経済状態、治安ともに悪くなり、政府への不満を溜めることに繋がりがかねない。世界が統一されたことを良く思わない一部の人間の、今後の動きに牽制を入れるという意味合いも含めた宇宙開発は、人類の期待を裏切ることなく成功を修めた。

第1号として、月の周回軌道上に配置されたコロニー《クライスト》を筆頭として建造された、23機の非自立型コロニーは、一機につき、凡そ5000万人を収容出来る、当時としては超ド級の建造物であり、地球に住む人々はその存在に好奇心を抱き、宇宙での生活に憧れた。しかし、非自立型コロニーには欠点があったのだ。それは、その名の通り自立して生産を行えないという点。常に地球からの配給物資に頼る生活を送ることになっていたのである。この欠点は、EDENの想像以上に地球の経済を圧迫した。半年に一度送るシャトル群の開発費用に、積み込む物資の調達。人口が空に捌けたとはいえ、エネルギーや物資の消費が激しくては、何一つ解決には至っていないのだ。

そこでEDENが進めたのが、自立型コロニーの建造。生産と消費を全てコロニーの中で済ませようというのである。そして出来上がった、第24号コロニー《ユピテル》。地球の期待を一手に集め、そして成功した。ユピテル自立成功のニュースは、世界を歓喜の渦

に飲み込み、地球全体が祝賀ムードに包まれた。最大で3億人収容可能な最大級のコロニーが、最大級の歓びを人類にもたらしたのである。その後も、5機のユピテル型コロニーが金星、火星、月、木星の周回軌道上に設置され、地球上の人口を70億人にまで減らすことに成功したのだ。そして、2180年からの約30年間に渡って推し進められてきた宇宙開発が、ユピテルへの物資輸送を最後に、いよいよ最終段階へと突入した。

事件は、この矢先の事だったのだ。

- - - - -

しかしこの後人類は、E D E Nの真意を見ることになる――。

第一話 完

episode 1：訓練と平和

SF小説【宇宙へ】

第一部：統一

episode 1：訓練と平和

『敵機21体撃破。機体状態、安全ヲ確認。戦闘シチュエーション
訓練ヲ終了シマス』

機械音が狭い室内に響く。ヘルメットの中の湿度が高いことから、
予想以上に汗をかいていると解った。

シートベルトを外し、楽な体勢になると、前にあったモニターが上
に上がり、スプリングの効かないシートが、プシュウと何とも情け
ない音をたてて倒れる。そのままシートにもたれ掛かるようにして
横になると、モニターの後ろに隠れていた扉の角から光が漏れた。
これまた情けない、プシュウという音をたてて、曲線のドアがスラ
イドしながら上に格納される。シートが前に進み、僕はようやく外
に出ることが出来たのだ。

外に出た瞬間、頬に冷たい刺激が走り、思わず飛び起きる。まだ光
になれない目を擦って前を見ると、一人の青年が立っていた。

「よっ、ミハエル。調子はどうだ」

両手に缶を持つ青年が、シート脇の情報端末をのぞきこむ。

「おっ、すっげえじゃん！21体撃破しといて無傷とか、お前にし
か出来ない芸当だろ、これ」

青年の手から缶を奪うようにして右手で貰う。ヘルメットを脱ぐと、エアコンが効いた気持ちの良い外気を感じた。にも関わらず、妙にモヤモヤとしたものが心に残り、どうにも素直に気持ち良いと感じられない。

「そんな事ないよ。護衛ミッションだって、ずっと自己保身に回ってしまつて失敗してるし、何より二時間ぶっ続けでやって21体なんて、正直ありえないだろ……。だいたい、撃破数ならウリエルとかのが、よっぽどスゴい。こんなスコア、全くもってスゴくないさ」

プシュリと、情けないようで小気味良い音をたてて、青年が缶を開ける。ゴクリと一口飲んで口を開く青年。

「ぶはぁ……。んでも、俺から見たらだいぶすげえって。俺なんか30分もしない内に機体大破してんぜ？二時間無傷ってだけでも十分なんだって」

そう言いながら肩を叩かれる。彼の名はサリエル・ブラウン。同期で入隊した友人だ。僕らは今、訓練生として連合軍一般部隊で訓練を積んでいる。担当教官曰く、ヴァーチャルリアティー（VR）を用いた模擬訓練を行える、このトーキョー基地に配属されるのは幸せな事らしいが、正直他を知らないから良く解らない。

「大破しない分、全然大丈夫だって」

サリエルの言葉に、違和感を覚える。その言葉はどこか妙で、おかしかった。

立ち上がり缶を開けようとして、気付いた。足の指に強い力が入っていたことを。ギチリと絞められた足の指を、手を使って開くと、

血が通い、ポカポカと温かく感じられた。

「おいおい。どれだけ力入ってんだよ。トレーニングでビビってんのかぁ？」

「うるさいなあ……」

僕の仕草を見て、カラカラと笑いながら言うサリエルに言う。ったく、あいつのからかい癖といったら……。

足が自由になったところで立ち上がる。足を地面につくと、重力を感じて、何故か安心出来る。トレーニングとはいえ、死の恐怖を身近に感じるというのは、激しいストレスがかかり、不安になってしまうものだ。

三十年前までこの世界は、命のやり取りをそう頻繁にするような世界ではなかったらしい。何と言うか、それこそ信じられない話である。十九歳になった今だからこそ、兵士になった今だからこそはっきり感じられるのだが、やはり今のこの世界は、平和とは程遠い状態だ。

木星周回上に設置されたコロニー《ユピテル》を中心に活動する、反地球球武装組織《Shangri-la》によるヨーロッパ進行。世界の緊張状態を高めたこの事件は、結果的に失敗に終わった。しかし、この事件によって武装化した地球政府。緊張が、宇宙にまで広がったのである。

そして結成された、E D E N軍。地球の叡智が結集して作られた最新兵器が配備される、いわゆる精鋭軍のようなものに、今僕は従軍している。平和なんて生まれた時から無かった、そんな僕たちの世代が世界の動乱を左右する存在なのだ。的外れのような気もするが、やはり人類の平和を求める精神は、本能のようなものなのだろうか。これが、現実なのである。

「平和……ねえ」

ボソリと呟いて、天井を見上げる。鉄骨が見える天井の寂しさが、どこか平和に見えた。

第二話 完

episode 2：ウリエル

SF小説【宇宙へ】

第一部：統一

episode 2：ウリエル

ピー、ピー、ピー

高い音が訓練用端末から鳴り響く。ビクリとして見てみると、基地司令部から一件のメッセージが届いたようだった。

端末の画面に触れると、ブウンという音と共に、ホログラムが現れる。間抜け面をした基地司令秘書からの連絡のようである。

『えー……エフン。三十分後の一三。より、中央トレーニンググラウンドにおいて、成績優秀者の発表と叙勲式を行う。各自正装をし、集合する事。勲章受与者に関しては、事前に報告してある通りの準備をなさい。以上』

またブウンと音を立て、ホログラムが消える。

「今日が叙勲式なんて、連絡あったっけ？」

サリエルに問うと、バカにしたような目で此方を見、そして溜め息と共に言われた。

「一週間前に言われたじゃねえかよ。お前は人の話を聴かないからそうなるんだって……。てか、そう言うことは、ミハエル選ば

れてねえのな」

「そうだったけ？まあうん、選ばれてはいないよ」

視線に苛立ちを感じるが、もとはと言えば自分が悪いため、どうにも言い返せない。

「何だかなあ……。やっぱり今回もウリエルが選ばれんのかあ？司令側の選考基準って、基本撃墜数だけな気がするんだよな。もしくはウリエルが最優先されてつかのどっちか。うん、絶対そうだ」

サリエルの言い方もどうかとは思うが、言っている事は確かだ。無論、ウリエルの技術だとかには目を見張るものがあるが、あくまでもそれは「ゲーム」的な感覚だけで通用する話。命をかけた戦闘で、生き残れるかどうかというのは、また別の話だろう。

「まあまあ。落ち着こうよ。そうだとっても、確かにウリエルの技術は凄いんだからさ」

自分の気持ちを押し殺し、サリエルの背中を押して更衣室に向かう。感情が、燦った。

- - - - -

熱いシャワーを浴びると、体についた汗がざつと流れ落ちる。急がなければいけないと解っていても、気持ち良さにどうしても甘んじてしまう。流れ落ちる汗と水流が混じり、排水口の周りで渦を巻いていた。

この自分への甘さが、後々後悔に繋がらなければ良いのだが……。

シャワーを止めると滴り落ちる水滴。体を伝う水を振るい、タオルで拭き取ると、白い肌にスカッとした心地よさが漂う。少し残った水滴をそのままに、洗いざらしの白いシャツを着る。何とも爽やかな気分である。ドライヤーが自動で頭を乾かしてくれている間にパントンを履き、カッターシャツに身を包み、指定のズボンに足を通すと、それだけで兵士としての実感が沸くようだ。

最後に、普段着ない儀礼用制服に袖を通し、青のベレー帽を被り、鏡を確認する。自分で言うのもなんだが、すっかり見違えるような兵士になっていた。

- - - - -

シャワー室を出、これまた見違えるような兵士になったサリエルと合流する。

「へへへっ、立派な兵士になってんじゃねえか。この格好だと、普段のヘタレっぷりがさっぱり解んねえな」

「うるさいってえの！」

減らず口を叩くサリエルの鳩尾に、肘鉄をかましてやる。ゴフツと痛そうな声をあげ、うずくまる男を尻目に、綺麗に清掃された廊下を歩くと、後ろから肩を叩かれた。

「よお、ヘタレ君」

聞き覚えのある男の声。

「……ウリエル」

「『ご名答』」

振り向かずにそう言うと、何とも腹立たしい返答。この男が、何故か僕を目の敵にする天才児、ウリエルだ。

「今回の叙勲者、また俺なんだよ……。ったく、嫌んなっちゃうよな。何度も何度も前に立たされてさ、いくら成績優秀だからって」

「解った解った。もう良いって。十分解ったから」

腹の立つ自慢を途中で無理矢理打ちきらせ、肩に置かれた手を振り払う。

「お……誰かと思えば、ウリエルじゃん……」

後ろからやって来たサリエルの、どこか落胆した声。

「ああ、誰かと思えばどこぞのお馬鹿さんか。相変わらず、機体を大破させてばっからしいね」

「んだと!?!」

ウリエルに掴みかかろうとするサリエルを抑え、ウリエルと距離をおかせる。

「落ち着いてっ！落ち着いてっばサリエル！」

サリエルの両腕を壁に押し付けるようにして押さえる俺を、蔑むように見るウリエル。

「お前も物好きだよなあ、ミハエル。そんな馬鹿とつるむなんてよ。あ、そうか、お前も馬鹿だから」

「は……ははは……」

殴りかかりたい気持ちを、ガアガアとかなりたてるサリエルと共に押さえつけ、愛想笑いでその場をやり過ごす。

その態度が気に食わなかったのか、フンと一度鼻を鳴らし、ウリエルはその場を去っていった。

まだ騒いでいるサリエルを、諭すように落ち着かせ、ようやくその場から移動する事が出来たのである。

第三話 完

episode 3：猜疑の叙勲

SF小説【宇宙へ】

第一部：統一

episode 3：猜疑の叙勲

退屈な話。トレーニンググラウンドに集まった、おおよそ10000人のEDEN軍5師団に響く司令秘書の言葉は、至ってつまらないものであった。

しかし軍隊。居眠りを許されるほど、甘い集団ではない。眠りそうになっているサリエルの脇腹を、右手で軽く小突いてやる。まあ、寝ても仕方ない話だとは思うのだが……。

話もいよいよ終盤に近付き、ウリエルの叙勲という、正直な所聞きたくないような話に入る。撃墜数が最大だとか、模擬戦闘での戦績が一番だとか、サリエルの言う通り、甚だ疑問の沸く判断基準。戦闘に出ていないからこそ出来る、平和な叙勲ではないか……。

ふうと一息吐き、壇上に焦点を合わせると、ウリエルが立っていた。司令秘書の話も終わり、叙勲者の話の時間になったらしい。

今まで何度聞いてきただろうかという程の、ウリエルのこれまた下らない話。何か、上手い（と思い込んでいるらしい）事を言う度に鼻を鳴らすその姿に、腹立たしさを覚える。それはサリエルも同じようで、馬鹿らしい話をし続けるウリエルを、蔑むようにして見ていた。

壇上に目を戻すと、ウリエルと目があった……気がした。

- - - - -

叙勲式も終わり、下らない話から解放された兵士たちが、それぞれの持ち場へと戻って行く。皆がその解放を待ちわびていたようで、どの顔も疲労を色濃く湛えていた。

「ウリエルなんてさ、ただゲームが上手いみたいな、正直そんなとこじゃねえの？確かに模擬戦では勝てねえけどさ、それでも何か、やっぱり納得いかねえよ」

他の兵士から聞こえてくる不満の声。やはり皆が皆納得出来ている訳では無さそうだ。

「シッ。誰か聞いてたらどうすんだよ」

「んなもん知らねえよ……。てか皆思ってたんじゃないの？あんな奴……」

パンツ……

友人の制止を振り切り、先程よりも大きな声で話した男の頬に、強い張り手が飛んだ。ざわめくグラウンド内に響く澄んだ音に、周囲の兵士たちが何事かと音源に視線を向けると、張り手を振り切った姿勢のままにいるウリエルと、頬に大きな紅葉を残して立ち尽くす、不満をもらしていた兵士がいた。

「貴様は恥ずかしくないのかっ！兵士として他人を僻んでいるばかり！……フンッ、だから所詮でめえらは雑魚なんだよ！」

「くっ……」

言い返せない兵士。周囲の兵士たちも視線を下に伏せている。そん

な中、果敢にも腕捲りをし、ウリエルに立ち向かおうとする馬鹿な男が一人。

「おい、ウリエルてめえ！そこまで言うことねえだろっ！」

無論サリエルである。

こうなってしまうては、止めるしか他ない。我慢弱いというか、何と言つか……。

腕を掴んで止めようとするが、力が普段のそれではなかった。

「放せ……放せよミハエル！今はどうしてもこいつを殴りたい！てか殴らなきゃなんねえっ！」

サリエルが、泣いていた。押し返される腕、力の入らなくなる手。体を持ち上げられ、そして……。

「うらあっ！」

ウリエルの顔面に決まる、サリエル渾身のストレート。地面に倒れたウリエルに、サリエルが鬼のような追い討ちをかける。

「撃墜数が多けりゃ、それが偉いのかよ！勲章が多けりゃ、それで偉そぶって、人の頬張つても良いのかよっ！周りのお前らも、何にも言い返せないのかよ……！」

気絶したウリエルの上に乗るサリエルは、その怒りを地面に向けて発散していた。何度も何度も、地面に打ち付けられた手は、皮が捲れ、血が流れ出している。その様子を見た周りの兵士からも、涙が零れた。止めようとする兵士たちと、中心にいる二人が作る人だかりは、もうグラウンド全体の注目を与えるに相応しいものだった。

- - - - -

その後の事は、正直良く覚えていない。人だかりに上官が割って入って、サリエルを連れてって、厳罰なんだって叫んだ。その上官に、周囲にいた多くの兵士が抗議して、サリエルを庇ったり……。それで理由があつたのだらうと判断した上官に、僕もサリエルと一緒に連れていかれて、結局一ヶ月のトイレ掃除を命令されたりとか……。まあ、そんな事より何より覚えているのが、いつになく真面目なサリエルの顔。ずっと無口で、本気で怒ったサリエルが、本当に怖いと思つた。

この顔を、もう二度と見たくはないとも。

第四話 完

episode 4：追憶

SF小説【宇宙へ】

第一部：統一

episode 4：追憶

兵士に与えられるレーションというものは、量が少なくてもカロリーが摂取出来るよう、高タンパクなものになっている。つまり、体内で分解された際に、硫黄が通常より多く生成されるということ。まあ、結論から言わせて貰うと、とにかくトイレが臭い。硫黄が過剰に含まれている、すなわち臭いの元になる物質が多いという、トイレ掃除をする人間にとっては甚だ迷惑な話だ。

「くっせええええっ！」

一日たって、いつも通りの顔つきに戻ったサリエルが悶絶する。普段使っている時から、臭いことが解っていたにしろ、その元になる汚れを始末するのは、話が別だ。

「た……確かに臭いね……。もう……限界かも知れない」

誇張無しにそうなのだ。サリエルなんて、今にも新たな汚物を口から放出しそうな勢いである。

「うええええ……。ごめん、父ちゃん……。もう少しでそっち行っちゃうかしんねえ」

冗談めかしてそう言うサリエル。そういえばサリエルのお父さんは、あいつが幼かった頃に《Shangri-la》の襲撃で亡くなっていたんだった……。それが、あいつが入隊した理由らしい。復讐なんかじゃないと、あいつは普段言ってるけど、本心ではどこかに《Shangri-la》への憎しみがあるんだろう。

僕の記憶に、父の姿はない。母いわく、サリエルの父と同じく、僕が幼い頃に他界してしまったらしいが、それでも遊んだ事だとかはあるらしく、母は覚えていないのかと不思議に思っているようだ。何度も何度も思い出そうとしてはいるのだが、どうしても出てこないのだ。

こうして今も最も古い記憶を辿る。母が作ってくれたオムライス。僕の名前が書いてあって……。何故だか僕は泣いていて……。この時、何があったんだっけ？

思い出すことが出来ない。モップに上体を付けたその時。

カチリ

何かがモップに当たる音。胸元を見ると、幼い頃からずっと付けているロケットが目に入った。開けようとしても、開かないロケット。母から貰ったそれを、僕はずっと大事に持っていたんだった。確かこのロケットを貰ったのは、オムライスを食べた、あの日――。

- - - - -

真つ青なキャンパスに描かれる、飛行機雲の白い線を見ながら、僕はなんだか浮世離れたような気分だった。

両手の温かい感触に、思わず頬が緩んでしまう。この世の幸せを全て詰め込んで煮とかしたような、何もかもをスプイルしてしまう程、甘美な誘惑。幸福。

「綺麗なとこだね！」

そう言つて左を見ると、今より少し若い母が、怪訝な、いや泣きそうな顔をして此方に視線を送る。しかし直ぐに表情を変え、まだ泣きそうな笑顔になつてしまふ。その顔は、何かを我慢しているよう
で……。

突如として目の前が暗くなり、ふわふわとした感覚に陥る。

そして、まるで映画の場面転換のように、目の前の風景が変わつた。発射体制に入つた巨大なロケットと、その前で手を振る、大小二つの黒い影。その影が誰なのかが解らない。

何故か追い掛けなくなる衝動に駆られる僕の体を、後ろから何か解らないものが押さえつけている。知らず知らずのうちに泣いていた僕が、離してくれよと叫んで振り返る。

そして、そこにいたのは……涙を流す母だつた。

再び前に振り直つたとき、もうそこに影は無かつた。涙が止めどなく流れ落ちる。僕は、叫び声を挙げ――。

――

「あああああああああああああ――！」

頭を抱えて崩れ落ちる。サリエルが駆け寄つてきて、どうしたのだと聞いてくるが、何も答えることが出来ない。

思い出したうちに入らない程、小さな記憶。しかしその記憶が、何故かひどく衝撃的なまでに悲しい感覚をもたらし、僕の感情を激しく蝕む。気づけば僕の手は、胸のロケットを強く強く握っていて、血すら出るのでは無いかというほどの痛みが走っていた。

トイレの外がだんだんと騒がしくなる。僕の声聞き付けた人たちがやって来たのだろう。サリエルが外に飛び出し、助けを求める声が聞こえる。

少しした後、持ち上げられる体。サリエルがしきりに何か呼び掛けてくるが、何一つ理解出来なかった。

そのまま僕は、柔らかいベッドの上に体を横たえさせられ、そしてそこで、意識を失った。

第五話 完

episode 6：現実との対面

SF小説【宇宙へ】

第一部：統一

episode 6：現実との対面

「ミハエル・カミオカンデ訓練兵、ただいま市街地から帰還しました！遅れてしまい、申し訳ありません」

荒い息のまま、小隊長に敬礼をする。慌ただしく準備をしているところを見ると、小隊長も出撃準備の途中らしい。大方、結婚間近だという彼女さんと“また”小隊長権限を行使して、電話でもしていたんだろう。

「解った解った。良いから早く行け！」

戦闘服に袖を通しながら言うその姿に、呆れる気持ちを抑えて、出撃準備にかかる。

ロッカールームに入り、自分専用のロッカーを開き、ハンガーにかかっている戦闘服とグローブ、シューズを手取る。自分の体に合わせてしつらえられたそれは、普段の訓練では着ないような、それこそ戦闘の為に作られた物だ。

ピッタリとした圧迫感が全身から伝わってくるほど、自分の身体に密着する、僕の身を護ってくれるはずの物が、少しうつとうしく感じるが、リターンを鑑みれば、さして苦ではないのかもしれない。首元のジッパーをしっかりと上まであげ、肩に付いたボタンに軽く触れると、プシュツという、気の抜けた椅子よりよっぽど聞き心

地の良い音がして、身体と服の間にあった、僅かな空気を外に追いやってしまう。

戦闘服は今やまるで、自分の肌のように感じるほどの密着感である。

いよいよ戦闘を前にして、ブルツと一度、身体が震えた。

- - - - -

戦闘機が格納されているハンガーには、もう後数機の戦闘機しか残っていなかった。僕と、サリエルと、バカ小隊長の機体だけである。

ハンガーの入り口に備え付けられたロッカーから、ヘルメットを取り出して装着する。耳の辺りにあるボタンを押すと、バイザーが上がり、外の情景がクリアになった。

「よっ！いよいよだな」

後ろからトンと肩を叩かれる。そこには、同じ格好をしたサリエル。サリエルも何処と無く緊張しているようで、肩を叩く手に若干の力が籠っていた。

「まあ、訓練通りやればなんとかなるって」

ザワリ

サリエルの言葉に違和感を覚える。何かに引っ掛かるのだ。言葉そのものの違和感だとか、そんなものでは無くて、もっと根本的なことで。

この緊張感と違和感に、妙な不安を感じてしまう。生物としての本能というか、本当に何か解らない不安。

確かに戦闘を行うことへの不安はある。しかし、今感じている不安は、そういう不安ではないのだ。どこか落ち着いた不安。今までに感じたことの無いような……。

「おい、お前ら早く出撃しろ！」

そんなことを思っていると、ヘルメットを持った小隊長が、走りながらこちらに向かって来たため、思考を中断せざるを得なくなった。全くもって、タイミングといい態度といい、イライラする人間である。

「はっ」

形ばかりの敬礼と、息すらろくに入っていない返答をし、戦闘機の方へと向かう。途中で、サリエルにチラリと目配せをして。

- - - - -

Falcon-R2

次世代戦闘機開発計画の一環として開発された、高速航行を可能とする戦闘機。魚のようなシャープなフォルムと、その両翼に付いた波動式ジェットエンジンが特徴の戦闘機である。

装備はバルカン砲と、戦闘に依じて切り替え可能な、対空もしくは対地ミサイルのみという機体で、特に他の機体と差異がある訳ではないが、以前より各陣営が開発していた、波動式のジェットエンジン取り付ける事により、一般の戦闘機と比べて、最高速度が1.4倍近くなっているというのが、最大の強みである。

そんな、軍としての準最新鋭機は、戦闘前であってもなお、僕の目には凜々しく、そして頼もしく見えるのだ。

鉄骨組みの足場を渡る。カンカンと鳴り響く足音が、どこか物悲しげで、戦闘への不安を駆り立てて行く。カタカタと震える膝を、気力で抑え込み、なんとか前へと踏み出したは良いが、頼もしいはずの戦闘機のコックピットを見た瞬間に、足が止まってしまった。

「今からお前は、人を殺すのだ」

聞こえてくる、第二の自分の声。

「今からお前は、命をかけて闘うのだ」

第三の自分。

「今からお前は……」

「今からお前は……」

「今からお前は……」

「今からお前は……」

「今からお前は……」

次々に第四、第五の自分が、畳み掛けるようにして、僕を責める。全てが、今まで直視することが出来なかった“本物の”戦争。目を反らし続けた現実が、今になってようやく目の前に突きつけられた。無意識の内に意識していたものに、牙を剥かれたのだ。

「……………戦争」

ポツリと口を衝いて出た言葉は、まるで自分のもので無いようで……。おかしい感覚に、胃が圧迫されるような不快感。

「ううっ……………」

嗚咽に似たそれは、心を折るのに十分な衝撃。口から吐き出されたのは、胃液だけでなかった。

第七話 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2838r/>

宇宙へ

2011年10月6日21時27分発行